

クチャの石窟壁画の研究を基点とした西域 仏教文化の復元的考察

古来より西域と呼ばれてきた、現在の中国新疆ウイグル自治区に位置するタクラマカン砂漠周辺のオアシス都市は、かつてユーラシア大陸の東西を結んでいたシルクロード交易路の要衝であり、東西文化の十字路でした。それは同時に、インド発祥の仏教が東アジアへ伝来する上で重要な役割を果たした土地でもあります。私はかつての亀茲(クチャ)国の周辺に残された仏教石窟を中心に、西域の仏教石窟寺院を彩る壁画の研究に取り組んでいます。様々な仏教説話が描かれた壁画は、当時の仏教文化や仏教僧団を取り巻く歴史的状况を知るための情報の宝庫です。壁画から読み解くことの出来る情報を、考古学、仏教文献学、歴史学などの隣接分野の研究成果を参照しながら分析し、当時の西域の仏教文化の様相を立体的に復元することが本研究のゴールです。

シルクロードの仏教石窟寺院の壁画の 研究―異なる絵画様式が表象するもの

古来より商人や様々な文物が行き交った、ユーラシアを繋ぐ交易の路シルクロード。それは同時に、様々な文化と宗教が行き交い、そして出会う道でもありました。古代インドにおいて発祥した仏陀の教えが、様々な異なる言語・文化・宗教的背景を持つ土地を渡って日本へと伝来する過程で、仏教はどのような変容を遂げたのでしょうか。

現在の中国新疆ウイグル自治区に当たる、タクラマカン砂漠周縁部に残された仏教遺跡は、仏教東漸の様相を知るための手掛かりを与えてくれます。インド・イラン文化圏と漢人文化圏の境界であったこの地において、かつて大規模な仏教文化が花開きました。20世紀初頭の各国探検隊の調査により一躍学会の注目を浴びるようになった当地の石窟寺院は、その構造自体と出土写本、そして窟内を荘厳する壁画と彫塑によって、当時の僧団の信仰生活の実態を知るための貴重な情報を提供してくれます(図1)。

私が注目しているのは、西域北道最大のオアシス都市のひとつであった亀茲(クチャ)国の石窟寺院に見られる、地域的な特色を持つ「インド・イラン様式」の仏教壁画です。この絵画様式は一般的に、より自然で自由な描線の見られる「第一様式」(図2)と、装飾的効果を重視した「第二様式」(図3)に分類されますが、過去の研究史において、これら二種の絵画様式は様式的特徴に基づく年代論の文脈で語られることが殆どでした。しかし私は博論の研究以来、「第一様式」と「第二様式」の壁画には異なるタイプの説話伝承や歴史・社会的背景が反映されているため、根本的に別種の仏教文化を反映している可能性があるのではないかと



京都大学
人文科学研究所
特定助教

檜山 智美

Satomi Hiyama

西域仏教美術史
シルクロード文化史

いう問いに辿り着きました。

現在、この問いを解決するために、以下のアプローチから研究を進めています。



図1
クチャ郊外のシムシム石窟(筆者撮影、2011年9月)

説話図像の比定と絵画言語の シンタクスの確立

クチャのインド・イラン様式壁画で荘厳された石窟内は、莫大な数の仏教説話図像で満たされています。一つの窟内に60以上の物語が描かれていることも少なくありません。しかし、その多くはまだ未比定となっています。なぜなら、クチャの仏教壁画の制作者たちはクリエイティブで、他地域に比較作例の見られない説話図像も多く制作されたためです。

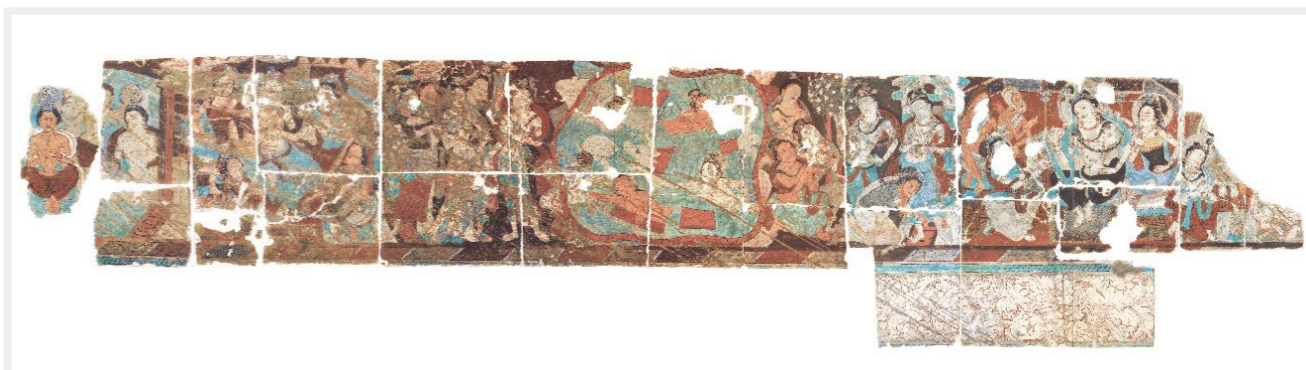


図2
キジル石窟第212窟(航海者窟)「マイトラカニヤカ本生譚」
(A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*, 1920, Tafel 19-23 に基づく東京藝術大学COI拠点によるデジタル復元画像。画像提供:東京藝術大学COI拠点)



図3
キジル石窟第205窟(第二区マーヤー窟) 亀茲国の王侯夫妻の寄進者像 (A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*, 1920, Tafel 48-49)

このような未比定の説話図像を、現地で知られていた経典と突き合わせていくことで一つ一つ比定し、クチャの説話図像のコーパスを増やしていくことは、亀茲国の仏教文化を知るために美術史が貢献出来ることの第一歩です。

なお、これらの説話図像は決して画家の気まぐれな創作

意欲によって描かれたのではなく、一種の絵画言語と言える、一定の視覚的語彙と視覚的文法の組み合わせから成り立っています。クチャの絵画言語のシンタクスを分析し、説話図像をテキストとして「読む」試みにも取り組んでいます。

歴史史料としての壁画―説話図像に 反映された現実の物質文化

ある仏教説話を可視化する作業において、画家はひとつの選択を迫られます。すなわち、経典に説かれていない細部は、どのように描けば良いのでしょうか。このような場合、クチャにおいては、現地に存在した物質文化を反映した描写が少なからず制作されていました。

特定の様式の壁画にのみ繰り返し登場する装飾品や染織品などの描写を、周辺地域の遺跡から出土した同時代の考古学的遺物や文献と比較分析することにより、壁画制作時の歴史的・社会的背景を考察する試みも行っています。

クチャの僧院において行われていた 儀礼の復元的分析

石窟寺院の構造、そして内部を荘厳する壁画には、かつてクチャの僧団によって行われていた仏教儀礼を知るための手掛かりが残されています。考古学や美術史という物質的なデータから、儀礼や演劇といった無形文化を復元することはどこまで可能なのでしょうか?現在、北京大学の考古学者及びマインツ文学学術院の仏教学者と共同で、この新たな研究の地平に挑戦しています。

参考文献

- ・ 檜山智美「壁画というテキスト クチャの仏教壁画を「読む」―美術史と文献学の領域横断的アプローチに向けて」『世界仏教文化研究』創刊準備号、2016年、pp.26-47.
- ・ 檜山智美/ロベルト・アールト「クチャの壁画に見られる宮廷道化師ヴイドゥーシャカの図像」『佛教藝術』第349号、2016年、pp.76-100.
- ・ Satomi Hiyama, "Untangling the Textiles in the Murals: A Study on the Monks' Robes depicted in the First Indo-Iranian Style Paintings of Kucha," *Journal of World Buddhist Cultures*, vol. 1, 2018, pp. 59-94.